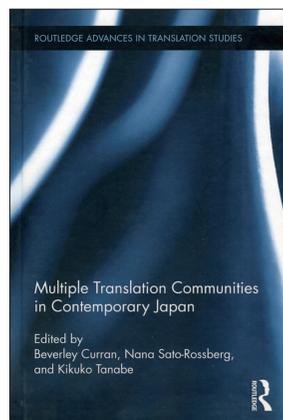


ベヴァリー・カレン、佐藤「ロスベアグ・ナナ、田辺希久子編  
『現代日本にみる複数の翻訳コミュニティ』

Beverley Curran, Nana Sato-Rosberg, Kikuko Tanabe ed., *Multiple Translation Communities in Contemporary Japan*.

M・テレサ・ロドリゲス・ナバーロ



Routledge, 2015

『現代日本にみる複数の翻訳コミュニティ』は、英語で書かれた翻訳学に関する優れた革新的な論集であり、日本におけるコミュニティの文化的・言語的多様性を追及することを目的としている。

「日本あるいは日本語内外に向けた翻訳の多様性、そしてそれらの理論化・位置づけ・実践に対する理解を深めるために用いられている方法／手法」(p.iii) を重視した本書は、優れた研究者であるベヴァリー・カレン、佐藤「ロスベアグ・ナナ、そして田辺希久子の三氏の手により編集されたもので、翻訳・文学研究、そして日本研究の優秀な学者たちの協力の下、一流出版社であるルートレッジ社から二〇一五年に刊行されている。

ベヴァリー・カレン氏は、国際基督教大学の社会・文化・メディアデパートメントで言語学、文化・メディア翻訳の指導にあ

たっている。また佐藤「ロスベアグ・ナナ氏は、イギリスのロンドン大学SOAS(東洋アフリカ研究所)の言語・文化学科で翻訳学の講師を、そして田辺希久子氏は、兵庫の神戸女学院大学の教授を務めている。

本書が文学翻訳のみならず、文化翻訳にも焦点を当てているということを強調しておきたい。またテキスト分析のほか、パラテキスト要素の分析、そして談話分析にも目を向けている。さらに、翻訳者の役割や翻訳の生成過程・翻訳手法、あるいは翻訳観、そして目標テキスト(Target Text)の受容に関しても論じている。本書では、「複数(Multiple)」という概念をトランスジェネリック(transgeneric)、つまりジャンルを超えるものという意味合いで解釈している。カレン氏も述べる通り、「本書では、文化生産や社会運

動に取り組む現代のコミュニティにおける翻訳を取り扱っている。また、複数の地域に目を向け、日本国内、日本とその他のアジア諸国間、そして日本と世界その他の国々との間における国際的な翻訳の流通についても考察している」(p. vii)。

本書は十章で構成されており、マンガ、映画、演劇等のジャンルを跨ぐ翻訳について論じる他、ジェンダー、横断的な翻訳、またクイア・コミュニティについて、そして文学翻訳なども取り上げている。

まず第一章では、ベヴァリー・カレン氏が、多言語の入り混じるマンガ『DEATH NOTE (デスノート)』(小畑健、原作・大場つぐみ)の分析を通し多次元翻訳について、そして日本を「多言語地域」として検討している。本論は、「日本のマンガ、あるいはその英訳版のバイリンガルな構造」、そして謡曲を想起させる豊かな間テクスト性が、いかに英語圏の文化への翻訳を困難なものにしているかについて「考察している」(p. iii)。その内実を明らかにするため、また読者の反応を探るため、ヤコブソンの言語内翻訳(intralingual translation)と記号内翻訳(intersemiotic translation)の概念、およびマクルーハンのメディアと翻訳に関する考えを用いて、このマンガ翻訳が単なるテキストの翻訳ではなく、「社会的概念や社会的文脈」の翻訳でもあること、言い換えれば、「死を与える権利(The right to kill)をも翻訳することが求められることを明らかにし

ている。カレン氏は、マンガ『DEATH NOTE』が「この世界の変化を知る手段として、翻訳にどのようにアプローチすべきかを示す職業である」と章を結んでおり(p. vi)、私見によれば、マンガ『DEATH NOTE』は文化翻訳の良例として捉えることができる。

ティタニラ・マートライ氏による第二章「映画になつた文学と演劇——新藤兼人の『黒猫』」では、『藪の中の黒猫』などをはじめとする一九六〇年代の映画において、監督が化け猫のような大衆向けの題材に、能の技術や演目をどのように融合させているかについて検討している。またこの作品には、そのタイトルにもあるように、芥川龍之介の短編「藪の中」等との間テクスト性も見られる。この傾向はそのタイトルにも現れている。マートライ氏は、黒沢明監督の『羅生門』への直接の言及は避けてはいるものの、『羅生門』との間テクスト性をほめかす要素も多数組み込まれている。また映画には、『平家物語』や歌舞伎なども登場するため、これらの要素が英語圏の国々のようなかけ離れた文化への翻訳を一層困難なものにしていることについても論じている。

『カムイ外伝』を翻訳する——マンガから実写映画へのジャンル間翻訳をめぐって」と題した第三章では、佐藤・ロスベアグ・ナナ氏が、マンガ『カムイ外伝』(一九六五)から実写映画『カムイ外伝』(二〇〇九)への翻案に関わるプロセス、手法、そしてその翻案作品について分析している。また、このジャンル間翻訳に

おける社会的背景の影響、そして翻訳者の可視性 (Venuti, 1995) についても考察している。

「カムイ」は、もともとアイヌ語で神を意味する。意外なことに当初原作者は「アイヌ」を題材に作品を描こうとしていたが、最終的に「カムイ」という忍者となった非人を描くことになった。非人であり、チャンスに恵まれないカムイは忍者となるが、やがて「抜け忍」となり、生涯、他の忍者に追われ続けることになる。

プロットの軸となるのは、生き延びるための戦い、そして社会的差別問題等である。カムイは生きるために多くの他者を犠牲にしなければならぬ……。そのため、崔洋一が監督を務めた映画には、日本で差別されてきた「在日」に纏わる話が含まれている。崔洋一自身、韓国籍を取得しているが、生まれも育ちも日本である。この章は、ジャンルを跨ぐ翻訳者としての崔の役割に焦点を当てつつも、マンガの登場人物やその精神がどのように翻訳されているのか、その翻訳手法、そして映画の受容について、さらには、観客のコメントに依拠しつつ翻訳の質についても明らかにしている。

また、佐藤＝ロスベアグ氏は、この論考を起点テキスト (Source Text) である『カムイ外伝』(十七世紀を舞台とする) の歴史的背景の分析から始め、プロット (テキスト) の要約を見事に行なっている。また、映画 (目標テキスト) の監督／翻案者だけでなく、マ

ンガ (起点テキスト) の原作者である白土三平についても取り上げている。

このように著者は、翻訳過程と登場人物について、特に、監督が男女の登場人物たちをどのように「翻訳して」いるのか、彼らの姿勢や感情がどのように表象されているかに着目している。また、主人公であるカムイの「精神」がどのように翻訳／変換され、またそれが批判されているか否かについても解き明かしている。

また、この章では映画の受容についても考察しており、インターネット上のレビューや感想を検討することにより、監督の主な目的 (スコpos) が「新世代の視聴者たちの心を動かし、交流を図ること」であったと結論づけている。残念ながら監督のこの試みは成功することなく終わっており、佐藤＝ロスベアグ氏は、その諸要因についても探っている。

第四章「翻訳できない革命——一九七〇～一九八〇年代の日本における女性解放運動言説の変容」(ジェームズ・ウェルカー著) は、日本のフェミニズム論の歴史を取り上げている。カレン氏によると、「アメリカのフェミニズム理論の日本語訳は、バトラーが言うところの「複数の文化領域が会場う場に出現する理論」(Butler, 1999, p. 12) の可能性を切り開くうえでの翻訳の意義を示す例である」という (p. 8)。

この論考では、翻訳者の認知度やイデオロギー形成における

ウーマンリブ運動の重要性と影響について強調している。そのためウエルカー氏は、一九七〇年代並びに八〇年代に日本の女性たちが翻訳をどのように用いていたのか、また、どのような文章が翻訳されていたのかについて考察し、これらの文章が、女性の身体とセクシュアル・アイデンティティをよみ変えるのみならず、日本における女性解放運動に貢献した著作の着想源になったと説明している。そして、フェミニストによる翻訳が用いられ始めたのは何もこれが初めてではなく、すでに一九一〇年代頃の日本に始まっていたと結んでいる。それにも関わらず、つい最近まで翻訳学の学者たちは、主に文学翻訳を重視し研究を進めてきた。この論考では、社会の異なる側面や歴史的な動きに対する理解を十分に深めるために、それ以外の翻訳研究にも取り組む必要性が強調されている。

第五章の「日本語訳にみるキャサリン・マツキノン——ラディカルフェミニズム翻訳論へ」と題したキャロライン・ノルマ氏による論考では、二〇一一年に和訳が刊行された『女の生、男の法』を主な分析対象とし、「ラディカルフェミニズムの視座からみた翻訳の理論と実践」(p. 79)や、フェミニズム論のテクストの発展について、そしてその和訳を手がけた翻訳者たちに焦点を当てている。さらに本章では、理論用語や法律用語を翻訳する難しさについて着目する他、翻訳者たち(森田、中里見)の可視性、そし

て彼らが従事しているフェミニズム運動(特に、性風俗産業を女性に損害を与えるものとする反ポルノ/売春運動)などを、翻訳の重要な背景要素として浮き彫りにしている。またノルマ氏は、起点テクストの著者と翻訳者とのやりとりの重要性を強調している。

第六章「日本でクイアを訳す——一九九〇年代のゲイブームにおける情緒的帰属意識と翻訳」においてジェフリー・アングルス氏は、クイア読者やそのコミュニティに属する人々が、翻訳やクイア・テクストを通してどのように互いを探し求めるかについて、また、その感情的な繋がりがこれらのテクストの日本語訳の読者間だけでなく、英語で読んだ読者との間にも生まれることを詳しく論じている。

アングルス氏の興味は特に、日本の「ゲイブーム」(一九八〇年代並びに九〇年代)で人気を博した翻訳書に向けられている。彼はまた、クイア・テクストの翻訳者と読者について、そして彼らの間に生まれる絆や同一化現象についても分析している。アングルス氏は一九九〇年代のゲイブーム文学における主要小説、伏見憲明著『魔女の息子』(二〇〇三年)に言及し、本章を結んでいる。この小説は、「欧米のゲイらしさの概念に共感することなく、他の男性とのエロティックな行動に耽ける日本の男性たちを探究」(p. 28)しており、一九九〇年代のアメリカやヨーロッパで人気を博したゲイ小説とは、その趣を少々異にしている。また、柿沼の

『魔性の森』（二〇〇一年）をはじめとする、主に若い女性読者を対象としインターネットブームと共に登場したサブジャンル、「耽美小説」についても解説しているが、この本は、海外のクイア文学の翻訳ほどの人気を集めることはなかった。

第七章の「ペーズリーの危機と男女（おとこおんな）——テロップを通し日本のプライムタイム番組を横断するクイア」では、クレア・マリイ氏が、日本文化の特徴であり、異性愛の規範を強化する、社会構築物としての日本の女言葉（*W.L.: Japanese Women Language*）の翻訳に焦点を当てている。つまり、日本における言語内翻訳に焦点を当てているわけだが、マリイ氏は日本のプライムタイム番組にみる「オネエ言葉」の分析を通して、このクイア特有の話し言葉が、「クイア・コミュニティとの距離を保ち」（p. xi）つつも、主要テレビ番組の消費者に向けていかに徹底して同化（あるいは適切化）されているかについて指摘している。

「言葉における性差の翻訳——谷崎潤一郎の『痴人の愛』から吉本ばななの『キッチン』まで」と題された第八章では、金志映氏が、「女言葉」の言語間翻訳（*inlingual translation*）を取り上げている。著者は、作家や登場人物が女性であること、例えばパラテクストの諸相を強調するのではなく、女性を主人公とする作品や登場する女性の声がどう英訳されたかを通して、日本女性のエキゾティックなイメージが繰り返し具象化されていることについて

論じている。

この『キッチン』の翻訳者であるバックス氏が直面した未解決の翻訳課題の一つは、「女言葉」をいかにして訳すかということであった。登場人物の一人であるえり子が、トランスジェンダーだからである。そのため起点テキストでは男言葉・女言葉が頻繁に使われているが、目標テキストにそのような特徴はみられない。翻訳者は、現代的な口調を現代英語に巧みに置き換えているが、起点テキストのスタイルや雰囲気翻訳には失敗したようである。また、目標テキストには起点テキストを操作（*manipulation*）した跡が幾つか認められ、ヴェヌティ（*Venuti, The Scandals of Translation: Towards an Ethics of Difference, 1998*）は、この操作を異化（*foreignization*）の一例として挙げている（p. 100）。金氏が論じるように、日本語をエキゾティックなものにすることにより、日本の独自性が強化されている様子をつかむことができる（p. 165）。

第九章には、下楠昌哉氏による『魔人ドラキュラ』の翻訳家、平井呈一と文学におけるシェイプシフター」が収められている。本章では、平井呈一による *Dracula* の日本語訳の経時的変遷を分析する他、再翻訳の考察、そして同書の翻訳史のみならず、翻訳理論へのアプローチの仕方にも重点的に取り組んでいる。

そして、最終章にあたる第十章「日本語訳における尹東柱の詩」では、朴銀姫氏が尹東柱の詩の翻訳の難しさについて考察し

ている。戦後、数多くの翻訳者や作家たちがこの詩人の詩の翻訳を試みてきたが、これは極めて困難な作業を伴う課題である。この章で朴銀姫氏は、ハングルで書かれた起点テキストとその日本語訳を考察するとともに、複数の翻訳の違いをあぶり出す比較文学的アプローチを用いているが、読者はこの論考を通して、そのいくつかの和訳の例に触れることができる。また朴氏は、満洲に生まれた朝鮮人移民の子孫である尹東柱について探りつつ、二十八歳という若さで早逝した彼が韓国の国民的詩人になったという事実を重視し、詩を韓国語から日本語へ訳す際に生じる翻訳問題、そして前掲した二カ国の状況の違いについて強調している。

#### 結論

本書では、現代日本におけるコミュニティの多様性を明らかにするため、そしてその多様性が文物や文化的製品にどのように反映されているかを考察するため、綿密かつ優れた研究方法が採られている。翻訳を取り巻く状況の重要性、翻訳者の役割、そして日本のコミュニティ、日本人、また他のアジア諸国、さらには西洋における日本に対する反応の重要性についても明らかにしている。また本書は、翻訳がただ言葉を訳すだけでなく、文化をも翻訳するものであるということに着目している。この論集は、翻訳学の、特にその日本の文脈にまつわる研究において多大な貢献となる先

駆的かつ卓越した研究である。翻訳学に留まらず、カルチュール・スタディーズ、社会学、文学研究の観点からみても非常に優れた洞察であるといえる。洗練された筆致で、分かりやすく書かれており、学者や翻訳者、そして日本研究や国際関係学に興味のある全ての人が手に取るべき一冊である。

(翻訳・片岡真伊総合研究院大学博士後期課程)